

『坊っちゃん』と『文学論』序

——系図・カーライル・劍舞・天誅——

中原 章 雄

はじめに

明治三十九年（一九〇六年）、夏目漱石は大学、高校の教壇になおとどまりながら、多彩で精力的な文筆活動を続けていた。

ここで特に注目したいのは、二つの文章である。一つは『坊っちゃん』であり、明治三十九年四月号の『ホトトギス』に掲載された。もう一つは、『文学論』の序である。こちらは、同年十一月四日に『読売新聞』に発表された。

両者はこのように、同じ年に約半年の間隔を置いて発表されたのであった。しかも、ともに自伝的な性格を持つ文章であった。

とはいえ、両者は基本的にまったく異なるジャンルに属する文章である。『坊っちゃん』は軽妙な口調で語られるフィクションであり、『文学論』の序は、漱石自身の言葉で云えば、「学理的閑文字」の大作の序である。

『坊っちゃん』という小説では、独身教員である主人公の結婚のことが話題になるが、作者漱石は、翌年五高に移って間もなく、実際に結婚している。

このあと彼は高等学校に四年ほど勤務したのち、文部省留学生としてイギリスに渡ることになる。こうして彼は、『文学論』の執筆も開始するが、このような経過を綴ったのが『文学論』序なのである。

ここで確認しておくならば、この序は約一万字にも及ぶきわめて長文の序であるが、その中で最もよく知られている一節が、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり」と始まる、留学生生活を要約した部分であろう。

何がそれほどまでに漱石を二年間の「不愉快」に閉じこめたのか、明確な答えはいまだに出ていないようである。

ここでは、とりあえず、『坊っちゃん』を読むに際して、この小説が書かれた少しあとに書かれた漱石自身の言葉を念頭に置いて、『坊っちゃん』を読み直してみたいのである。

1 系図と伝記

小宮豊隆の伝記『夏目漱石』は、昭和十二年に、前年に完結した、いわゆる「決定版」夏目漱石全集を補うようにして、岩波書店から出版された。

この伝記は、岩波版全集の事実上の責任者であった小宮の筆になるだけに、今日もなお信頼できる漱石伝と一般に評価されている。

その一方で、弟子小宮の師漱石に対する態度に関して、とりわけ晩年の漱石を安易に、いわゆる「則天去私」の境地に達した人物像として描いているとする、様々な厳しい批判が加えられて来たことも事実である。

けれども、ここで私はそのような伝記全体にかかわる小宮の姿勢を取りあげようとするのではない。伝記『夏目漱石』の第一章の、しかも冒頭の一節を対象にしたいのである。

小宮はそこで、主人公坊っちゃんが自分の出自に関して「いきまぐ」ように語る台詞を引用している。^①

これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生まれからして違うんだ。

「旗本」が「清和源氏」と簡単につながり、さらに「多田の満仲」と結びつくのは、ここでは、坊っちゃんと云えども、はじめての勤務地で宿直をして、その夜に新任教員をからかう生徒たちへの対応に平静を失って「いきまぐ」ことになるからであろう。同様に系図を持ち出す場面が小説の後半にも出てくるが、ここでも坊っちゃんの頭に血が上っている場面である。

この系図に私がこだわるのは、小宮がこの一節について、「本家に伝わる夏目家系図によると」と注釈をつけて、「漱石がかつて何かの機会にうちの者から聴かされた家の系図が、遠いこだまのように響き出たものではないかと思う」と根拠ありげな説明を行っているからである。

なるほど、これといった確証はないらしいが、小宮の云う通り「遠いこだま」説もありうるかもしれない。しかしながら、小説の問題の一節は、先に言及したように、二度とも主人公が冷静さを失っている状況で「いきまぐ」ように吐き出した言葉なのである。しかも作者漱石は、くどいほど主人公のことに關して、「智慧が足りない」という自身の弁を同時に眩かせているのである。

たしかにここで多田の満仲が飛び出すのは、小宮の「遠いこだま」説

を裏付けているのかもしれない。清和源氏と大きく出て、次に義家や義経を出すと嘘っぽいのが、満仲なら、それなりに信憑性があるかもしれない。

けれども、多田の満仲には、かりに坊っちゃん自身は知らなくとも、漱石は彼の暗い影を知っていたのではないだろうか。

多田満仲は、武勇よりも陰謀や内通によって後世に知られる人物らしいが、かりに漱石が史実に関心がなかったとしても、自分の小説の主人公が家系についてくさり述べることになれば、その人物のイメージにかかわるのだから、無関心ではおれなかつたであろう。

この小説の有名な場面で、坊っちゃんの東京弁に対し、地元の生徒が方言で対抗する箇所がある。

漱石は自らの教員としての体験と知識だけで満足せず、小説中の方言を、地元出身の高浜虚子にチェックすることを依頼した手紙が残っている。漱石は小説家として、それだけの手間を惜しまない人であった。

坊っちゃんが「いきまぐ」時の系図に關しても、「満仲」を持ち出すに關しては、漱石の目が行き届いていないはずはないとも思える。もつとも、主人公との關係については、伝記作者小宮豊隆は何も語っていないのである。

『坊っちゃん』という小説は「一気呵成」に書かれたと、しばしば語られる。原稿の複製が市販されるようになってから、漱石が短期間で書き上げたことは、それによっても実証されているようである。

だが、その一方で、小説家漱石はほとんど常に細心であり、いたる所で、『文学論』という文学概論的な著書の影が差していることを感じざるをえない。

2 「親譲りの無鉄砲」ということ

『坊っちゃん』の書き出しは、あらためて見事だと感服する。

「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る」という冒頭の文のすぐあとに、読者をなめるほどと思わせる具体例が三つ続けて説明される。

子供の時から失敗をくり返しても平気な子もいるだろうが、坊っちゃんは、「損ばかりして居る」ことを、彼なりに強く感じていることが読者に印象づけられる。知力については控え目に過ぎると思えるが、感じやすい性格は、はっきりしているのである。

『坊っちゃん』の書き出しは、『吾輩は猫である』のそれと同じ様に、成功例として挙げられることがある。しかしながら、『猫』の成功は、偶然的なものも作用している。『坊っちゃん』の場合は、小説家漱石の自信が、自分の技に対する自信が見えるようである。もう作家漱石は、いつでも離陸可能なのである。

第一章のなかで、人物としては、両親のほか兄と下女清が出てくる。兄の方は、ずるくて、卑怯な男として描かれていて、坊っちゃんの愚直な面の引き立て役のようなのだが、清の方は、いかにも上手に出来上っている。坊っちゃんが便所に落とした財布を洗って乾かす話など、特によく出来ている。

もっとも、両親に不評な若だんなに、まめまめしく仕える婢という設定は、ありふれていて、漱石もここでオリジナリティを要求するつもりはなかったであろう。とはいえ、清は「瓦解のときに零落し」た婆さんという道具立ては、いかにもうまく仕上っているにちがいない。

坊っちゃんが就職するまでの顛末も、きびきびと書いている。物理学学校の生徒募集の広告を見て手続きをして、三年間勉強し、校長推薦で中学校に就職するというについては、二度「親譲りの無鉄砲」という

言葉が使われている。「無鉄砲」というよりは、並の学生よりも坊っちゃんといえども、かなり地道な勉強をしていることが想像されるが、最初に決めた「無鉄砲」でできるだけ間に合わせるのがこの小説の巧みなところであろう。

第一章の終りで、「おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣くところであった」という別れの場面はいかにも上手い。『文学論』の第二編第四章でローレンス・スターンが出てくるが、一八世紀の感傷主義を生かしたところがあるのかもしれない。

この章の一番最後の文、清が「やっぱり立っていた。なんだかたいへん小さく見えた」も、卓抜としか評し様がない。

3 「野蛮な所だ」——カーライルの風呂桶と性夢——

坊っちゃんは、赴任地に到着して第一声で、この小説を支配する決定的な価値判断を下す。「野蛮な所だ」。

坊っちゃんの吐きすてるような短い言葉には、当然、江戸っ子としての気負いが満ちている。すぐあとに出てくる土地の方言を漱石が写真的に写し取っていることと共に、この小説は「差別小説」とも見られていい。

しかしながら、「差別」の実態はもう少し読んでからでよいだろう。

この章は、「ぶうと云って汽船がとまると」と始まる。坊っちゃんの、ある意味では、ささくれ立った神経には、汽笛の音さえ聞かされて聞かせるのであろう。そこへ、赤フンの船頭が登場する。彼の禪に坊っちゃんの厳しい視線が炸裂する。

けれども、瀬戸内であろうと、東京であろうと、この時代の、この季節に肉体労働者が禪姿であるのはそれほど珍しいことではなかったはず

である。坊ちゃんも、すぐ思い直して、「此熱さでは着物はきられまい」と云っている。「日が強いので水がやに光る」ともつけ加えている。

この時代の禪姿で思い出すことがある。イギリスの下級外交官アーネスト・サトウが来日直後の明治維新直前に相撲を見物して日記に残している。^②

もちろん国技館が建つ以前で、『坊ちゃん』にも出てくる回向院の勧進相撲のような風景であろう。サトウはそれでも観客は二千人位と見ている。彼は、競技のはげしさに注目しつつ、「力士はほとんど裸体で、まわしをつけているだけ」と記している。

サトウは初めて相撲を見るのだが、外国人として力士たちの姿に特別なコメントは下していない。

坊ちゃんの第一印象となるつぶやきは、読者を以後支配することになるが、坊ちゃん自身もそれに縛られることになる。

学校の授業の前に、彼は「敵地に乗り込む様な気がした」と記す。新米の教師が緊張するのは当然でもあるが、「敵地」という露骨な表現に見られる彼の気負いは、東京を代表しているつもりなのであろう。

坊ちゃんは、天婦羅事件（彼自身の用語である）・団子事件などに、つぎつぎと巻き込まれる。「何でこんな狭苦しい所に来たのかと情なくなつた」と歎き、「生徒全体がおれ一人を探偵して居る様に見えた」と意識過剰にもなる。

しかしながら、われわれは坊ちゃんの過敏な神経にばかり注目すべきではないであろう。天婦羅にしる、団子にしる、坊ちゃんは口福を満足させているのである。この辺りの主人公を描きながら、漱石は彼が歎いたロンドンの下宿のまじい飯のことを思い出さなかつたであろうか。

天婦羅・団子とともに、「坊ちゃん」が悶着を起こすのは、温泉で泳いだことである。だれもいない時に、「湯の中を泳ぐのはなかなか愉快だ」

と彼自身がおおっぴらに認めている。この時も、学校で黒板に、「湯の中で泳ぐべからず」と書いてあるのを見て驚いてしまう。この時も、土地の狭苦しさを呪って、ほこを収めることになる。

だれもない広々とした温泉で泳ぐこと、豊かな水量の湯につかるというような贅沢は漱石にとって食物以上に異郷では味わうことの不可能な楽しみであったにちがいない。しかも漱石は、おそらく並の日本人以上に温泉や入浴を好んだ人であったようである。

これに関連して思い出されるのは、漱石が留学中に訪問し、そのことを書いた「カーライル博物館」である。

訪問者は、建物の三階でカーライルが使っていた質素なベッドを見て、「その上に身を横えた人の身の上も思い合わさるる」と書いている。傍らにカーライルが平生使用した風呂桶が「尊げに」置かれている。

風呂桶とはいうもののバケツの大きいものに過ぎぬ。彼がこの大鍋の中で倫敦の煤を洗い落としたのかと思うと益々その人となり^③が偲ばれる。

スコットランド生まれのカーライルは、風呂について、基本的に漱石と考え方が違っていたようである。そのことにも関連して、唐突なようだが、以前に読んだ『座談会明治文学史』の漱石に関する発言を思い出す。

『座談会明治文学史』は、日本の近代文学研究者の第一世代とも云うべき碩学が出席して明治文学史を論じた記録をまとめた書物である。出席者の中でも、とりわけ博覧強記で知られた勝本清一郎が、漱石の性体験について日記に言及したのであった。

それは、明治三十四年三月一日の、ロンドン留学中の記録であったら

しい。当時一般に読まれていた岩波版新書版全集によると、三月一日の記録として漱石は次のように記している―「夜入浴、此夜妄想を夢む。入浴後寝に就きたる故か」。漱石はくつろいだ気分に入浴し、性夢につながったのである。

しかしながら、すでに記したように、カーライルにとって、入浴は可ならずしも、くつろぎを意味するどころか、精神と身体強化を目的としていたようである。

カーライルはともかく、漱石が右のような日記を書き残したのは、それだけ留学中はくつろいだ気分を入浴から得るのが難しかったからこそであったようであろう。少なくとも、坊っちゃんのような贅沢と彼が無縁であったこと、だからこそ、小説のような描写になったことは、十分に考えられるのではなからうか。

少なくとも、ここでもそれほど遠い以前ではなかったロンドンの記憶が、あるいは満たされなかった願望が姿をのぞかせていると考えるのは、それほど奇異なことではないはずである。

4 芸者と剣舞

うらなり君の送別会は、中学校教員の生慥が仮借なく描き出される場と云ってよいだろう^④。

酒席での教員集団の様々な姿が、芸者の登場によって異様な盛り上がりを見せる。最初から孤立していた坊っちゃんが、ついに「まるで気違いだ」と決定的な言葉を発して送別会のまとめとしてしまう。

送別会の朝に山嵐が坊っちゃんにむかって、「大いに飲むつもりだ」と云い、坊っちゃんの方では「酒なんか飲む奴はばかだ」と云い返す会話によって、二人の違いは、最初からはつきりしている。

会をもうすこし時間を追って見てゆくと、最初に校長と教頭が羽織袴で着席し、校長が送別の辞を述べるが、まったく型通りのスピーチで、むしろ挨拶のパロディのような話である。

挨拶の後、「あちらでもチュー・こちらでもチュー」という音がする」と、汁を飲むのを擬声語を使っていかにも不愉快に響くように表現している。拳を打つ「よっ、はっ」と両手を振る息遣いの様子も気持ち悪い響きを写したのであろう。

何よりもこの場の雰囲気は漱石が伝えようとしている表現は、芸者数人が座敷に入ってきた時の様子である。座敷が急に陽気になり、「一団が鬨の声を揚げて」歓迎したかのように騒々しいと書いている。「鬨の声」はもともと軍用語であり、この時代に「鬨の声」を云えば何よりも日露戦争で旅順を攻撃する日本陸軍のそれを連想したのであろう。漱石自身、旅順には「吾輩は猫である」にも何回か言及しているし、『漾虚集』の短編にも登場する。

山嵐は隠芸として剣舞をやる。ところが、剣舞をやるから三味線を弾けと云うのだが、芸者は乱暴な声なので返事もしない。漱石は乱暴な声を表現するのに「号令を下した」と書いている。けれども、山嵐の方でも、芸者を無視してステッキを持って一人で隠し芸を演ずる破目になる。しかも、そこへ野だが裸踊りをやり出すという座は乱れ放題で、坊っちゃんが「まるで気違ひ」と宣告することになる。最後に、小さくなっていった、うらなり君を坊っちゃんが引張って、送別会と云いながら、「気狂会」ではありませんかと面と向かって云い、退席してしまう。ロンドンの漱石の記憶が最も表れないが、『文学論』との関係では、芸者に突撃する教員集団が『トム・ジョーンズ』の有名な場面（ホメロスのパロディとして知られる）を思わせるし、坊っちゃんと山嵐の悪口合戦は、これも漱石が引用している『ヘンリー四世』を思い出す。

エピソード

小説の最後は、主人公と山嵐が「天誅」を加えて、めでたく終る。

この場面で、とりわけ、坊っちゃんが野だの顔面にたたきつけた卵の描写が秀逸である。

玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだらと流れだした。野だはよっぽど仰天したものとみえる。やっと言いながら尻持ちをついて、助けてくれと言った。

「助ける」までもないことに野だがすっかり慌てふためいている様子が、いかにも面白おかしく描かれている。

けれども、この場面は読者の笑いを誘うだけではない。野だと赤シャツに対し、坊ちゃんと山嵐は、つぎつぎと「奸物」、「天誅」「正義」などの言葉を矢つぎ早にくり出しながら、相手ではかほかとなくるのだが、それに対する「理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」という赤シャツの抗議も吹きとんでしまう。

「天誅」という用語は今日の日本の読者にも、何となく受け入れやすいようである。けれども、半世紀ほど前の英訳でアラン・ターナーが使った直訳的な英語は、ペンギン・ブックスの新しい英訳では、もはや使われていない。

坊ちゃんは東京に帰り、清との感激の再会となる。彼は「ある人の周旋で街鉄の技手になる。」山嵐は「すぐ分かれたぎりきょうまで会う機会

がない」と終わっている。あっさりしたのだが、酒を飲まない坊ちゃんは彼と飲みかわしながら、中学校の懐旧談をすることもないだろう。

清は「お墓の中で坊ちゃんが来るのを楽しみに待っております」と言っ

て死ぬことになっているが、「だから清の墓は小日向の養源寺にある」と小説を終わらせた漱石のすご腕は、ここでも見事というほかはない。

〔補論〕

漱石の「すご腕」に感心して小論を終えたが、小説全体のあと味という、あらためて小説を読み返してみても、どうなのだろうという疑問が残らないではない。英訳のことを記したのも、そのためである。

しかしながら、この小説を書いて、漱石はロンドンの「不愉快な二年」をある程度清算したのであろう。

むしろ、『坊っちゃん』の軽快な語りは、倫敦の不愉快な二年の間においてしか、醸成されなかつたのかもしれない。

注

- ① 小宮豊隆『夏目漱石』（岩波書店、一九八六年）。「いきまぐ」台詞は第四章にある。
- ② 萩原延寿『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄1』（朝日新聞社、二〇〇七年）
- ③ 『漱石全集第二巻』（岩波書店、一九九四年）四〇ページ。
- ④ 送別会の場は、前掲の全集第八章に描かれているが、漱石が日本的な酒席の集団を描いた場面として、もっと注目されてよい。